

7	
報告テーマ	介護ロボットと共に歩む未来の“KAIGO” ～介護ロボット定着から、その先へ歩み続けるために～
法人名・事業所名	社福) 友愛十字会 特別養護老人ホーム 砧ホーム
報告者	捧勇太(介護職員)、渡辺陽子(介護職員) (共同研究者) 遠藤 拓也(介護職員)

電話	03-3416-3164	FAX	03-3416-0281
事業所紹介	砧ホームは、平成 4 年に東京都世田谷区砧(きぬた)に開設した、入所定員 60 名、短期入所 4 名の従来型の特養です。都内特養で唯一の東京都ロボット介護機器・福祉用具活用支援モデル事業のモデル施設となった施設です。施設には計 24 台の介護ロボットが稼働し、専門性の高い最先端の取り組みを推進しています。		

砧ホームでは、2016 年度、2017 年度の「東京都ロボット介護機器・福祉用具活用支援モデル事業」にて、装着型の介護ロボットを導入しました。

その後、「アクティブ福祉 in 東京 '18」において「介護ロボット」のテーマでポスター発表を行いました。

【背景と課題】

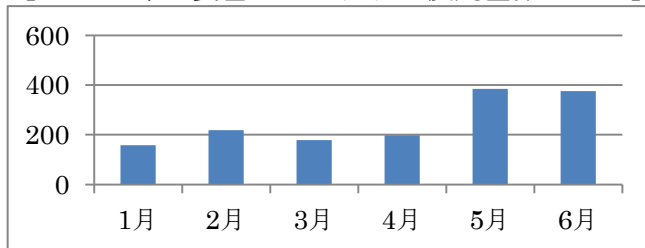
介護ロボット導入後(2016 年度)、装着型ロボットにおいては、使用する頻度は向上しているものの、全介護職員が一定の頻度で使用しているとは言えない状況でした。その為、「どのように工夫したらいいのか」、「全介護職員が“使用していて良かった”と実感してもらうには」と考えたことから今回の研究が始まりました。

【具体的な取り組み内容】

導入直後から使用していた装着型ロボット 2 台は同じサイズを使用していましたが、小型化・軽量化する為、新しい装着型ロボットを 1 台導入しました。そのことにより、今まで使用を見送っていた職員(特に女性職員)も使用する頻度が増えてきました。

使用頻度の状況を把握するため、集計を行い、毎月使用回数を全職員に周知を行いました。

【2019 年 装着型ロボット 使用回数グラフ】



【装着型ロボットを使用時の介助場面】



【考察・まとめ】

現在、全体的な月ごとの使用頻度は右肩上がりが増えてきているものの、業務に対する仕組みとして十分に定着しているとは言えない状況です。具体的には職員の中で、①「意識的に使う職員」②「意識はしているが使えていない職員」③「身体的な理由により使用できない職員」と分かれています。現在では入浴介助にも使用を始めており、業務の中でシステムとして具体的に組み入れる必要があると考えています。

この先も我々の仕事である KAIGO をより良く発展させる為にも、今回の実践内容を多くの皆さんに届けたいと思います。本件の掲載・発表にあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本件以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。